

‘ὁ κόσμος, ἀλλοίωσις ὁ βίος, ὑπόληψις.’

65号 1993.4.2

文・編集・発行

恋 怪子

LIVE: THE STREET BEATS 1993.3.26 新宿ロフト CD: "MAGIC & MADNESS" CD: "FEEL THIS"

歌に力があるということは、きく者がそれをはじめてきくように新しくきくめにきけるといことである。きく者は、だから歌のすぐあとをついていくことになる。歌に力がないと、はじめてきくように新しくきくようにきけず、きく者の頭には歌詞がうかぶ方が先になって、歌がそのあとをついていくことになる。そこにははじめてのものは、新しいものは、なにもない。きく者が歌のあとをついていけると、そしてそのことに集中できると、ほんのわずかな歌い方のちがいや歌詞のちがいがききとれて、それがそのときその瞬間の瞬間をわかる手がかかりになる。きいている者が自分を発見できる。このことは、歌にだけでなく、ギターやベースやドラムの演奏についてもいえることである。26日、27日のTHE STREET BEATSには文字通りの新しい曲もあつた。他の曲もはじめてきくようにきけた。やる方もきく方もいかに予め決めていたようなやりとりや予定調和がなく、きく者一人一人がそれぞれに自分の舟を操縦していくことができた。予定調和というものはみんなが一つの舟に乗っているようなもので、その予定調和にのれない者は川にでも落ちるしかない。みんながいっしょに乗っている舟は、どこへも進まず、ただそこにしばらく浮かんでいられるだけで、やがて沈没、ということになる。やる方もきく方も予め決めていられることをこなしていくだけのライブは「生きていくこと・ライブ」とはいえない。26日のライブで、私は急な流れを糸ひい流れを、一人で自分の舟を操縦し川を上流へ上流へと流れていった。φK1の歌を、THE STREET BEATSの演奏をずっとおいていっていったらそうだった。

山の奥のわき水がそのはじまりで、いくつもの支流を集めてやがて大きな流れとなって海にそそぐ。川を人生にたとえることができるけれど、26日のライブで私は上流から海へという流れとは反対に、上流へのぼっていくことで人生を生きていると感じていた。そして行きついた山の奥の糸ひい清らかなわき水は、人生の始点であると同時にその到達点でもあるといえるところだった。「サンクチュアリー」で終わったときにそこにたどりついていたから「風の街の天使」ではじまったアンコールの3回は本来の意図でのアンコールだった。カタルシスの中で楽しく歌と演奏を楽しんだ。じの中をさわやかな涼しい風が吹いていた。

27日は前日のライブのすばらしさが残っていて心をまっしろにできていなかったからだと思うけれど、「ワイルドサイドの夜へ」という新しい曲でライブがはじまってしばらくは心がわきたたなかった。それが5曲目くらいにやった「星降る夜に」をきいているうちに自分の現在を、THE STREET BEATSの現在をつかまえることができた。心がうるおってくるのがわかった。この日のTHE STREET BEATSはじわじわとしていた。SEIZIのギターも歌もすばらしかった。ICHIKAWAのベースも歌もすばらしかった。SHOJIのドラムもすばらしかった。そしてφK1の歌はあのびやかで、ギターはパワフルですばらしかった。あのまま、ずっと、どこまで行けると感じた。26日は川をのぼっていくと感じたけれど、この日はそのさかのぼったところにとどまっていると感じた。そしてそこは川のほとり、小さなわき水ではなく、深く人生を湛えている大海だった。



CIRCUS OF POWER

7/1の湾岸戦争で来日が中止になって残念な思いをしたけど、よりハヴィーなロックンロールになって

THE JEFF HEALEY BAND

3枚目のアルバム。JEFF HEALEYはギターもバッキングも、よりハヴィーなロックンロールになって

LIVE: METALLICA 1993.3.16 代々木第一体育館

「7月22日、エマーソン・レイク・アンド・パーマーのコンサートに集まった3万人の人間がどのようにして3万人も集まる場面を作ったのかを考えると、それは決してはいやなことではありえない。そこにはステージと客席というものの距離を越えるべき共感も熱狂もなく、白々しいあてのない欲求と、いまだちと何かを与えられよう感じようという退廃があっただけのようだった。(中略)そしてついにどのような共有もカタルシスもなく後楽園球場という広大な限定の場は閉じつづける。時間はコンサートの終りまでゆっくりとたってしまうのだった。しかも自分の手帳に金だけの自己満足と自己熱中を記載させた多くの人間のざわめきを残しただけで」

上記の文は「音楽」(1946~1978)が20年前に書いたものである(「音楽之友」1972年9月号)。この文の「7月22日」を「3月16日、17日」に、「エマーソン・レイク・アンド・パーマー」を「メタリカ」に、「後楽園球場」を「代々木第一体育館」に書きかえるだけで、3月16日、17日のメタリカのライブにそっくりそのままあてはまる。ステージがよく見える席だったのにもかかわらず私は全くステージを見る気にならなかった。音楽をとおしてなんにも視えてこないからなのだ。ヘッドバンギングをし、体をけいれんさせ、こぶしをふりあげ、歌にあわせて声と力を出して歌うといった「自己満足と自己熱中」をしている観客を見物していただけだった。全力を出しきらず余力を残している演奏。リアクションの要求になんでも服従の観客。はじめからおわりまで全部予定調和。16日、17日の2日間、私は「ついにどのような共有もカタルシスもなく」代々木第一体育館の椅子に座っていたのだった。



ジョニー・サンダースは
ついに家族を守ることができなかった
肝臓を緑色に染めて
三十八歳で逝ってしまった
「ジャンキー・ビジネスはもうたくさん
俺はもううんざりさ」
何回も、自分にいきかせるように歌っていたのに
どうして、麻薬をやめられなかったのだろう
淵のいたみをかきむしるように
命をすりへらし
おれにもやめることのできないものが
たくさんあるから
あんたを愛うことなんかできないよ
「失うために生まれてきたんだ
ベイビー 俺は生まれついての負け犬」
一九八五年のツバキハウス
ボーン・トゥ・ルーズを歌いながら
支えきれなくなって
ヨロヨロとステージにしゃがみこむ
笑ふふりをした
あんたの眼が泣いていたから
何も言えなくなっちゃったんだ
青い音符を抱く
ジョニー・サンダース
ステージで煙草を吸い、子供のようにはしゃいでしまう
やせさらばえた少年のジョニー、老人のジョニー
一音のギターが空洞をひきつらせ
燃えあがる時代の人体解剖図
激しくはしる音境の海を
腐敗した女たちの魂がとび
真白い斜視の花が咲きほこる
破裂するジョニー、脱獄するジョニー

POEM ボーン・トゥ・ルーズ

瀬沼 孝彰

☆ジョニー・サンダースはニューヨーク生まれのロックン・ローラー、ニューヨーク・ドールズやハート・オブ・ザ・シティ・バンドで活躍、一九九一年に逝去。享年三十八歳。彼の作品では「ボーン・トゥ・ルーズ」は「ジョニー・サンダース」2は「ボーン・トゥ・ルーズ」3は「ユー・キャン・トゥ・ア・メモリー」から引用

むくんだ街路の肌をさらし
静かに光る死顔の美観よ
「ひどく不安なんだよ
柱に自分の頭を打ちつけてるのさ
俺の感覚を取り戻そうとしているんだ」
「どうして、こうなってしまうんだらう
八王子の職場で
ぶざまに言いあらそうおれを
あんたの瞳が
じっと見つめているような気がしたんだ
情けない犬のような顔つき
話せなくなった口を、もこもこ動かして
その夜、あんたは向こうの空から
おれの部屋におりてきた
ウイスキーのグラスをおき
チューニングの狂ったギターを
そっと手渡したんだ
ギターをひけないおれの
何かを聞いてくれようとしてくれたのか
ジョニー・サンダース
あんたのいたみは癒えたのかい
近頃、おれも暗いことはかり考えてしま
まいってしまふんだ
「心の皮膚が少しも動かなくなつて
ジョニー・サンダース
「自分とはどこにあるのだらう
おれは今日も
あんたにへたな詩を書こう
枯れた風の街
うすら寒い、この夜の路上から
ジョニー・サンダースはニューヨーク生まれのロックン・ローラー、ニューヨーク・ドールズやハート・オブ・ザ・シティ・バンドで活躍、一九九一年に逝去。享年三十八歳。彼の作品では「ボーン・トゥ・ルーズ」は「ジョニー・サンダース」2は「ボーン・トゥ・ルーズ」3は「ユー・キャン・トゥ・ア・メモリー」から引用